

近世読書研究の現状と課題

——横田冬彦編『読書と読者』の書評として——

「暇なときの読書は、あらゆる階級の日本人が第一にすることである」⁽³⁾

プロイセン王国外交官のフリードリヒ・オイレンブルクが近世後期にそう観察して以来、趣味・娯楽としての読書はその先頭位置を音楽と映画鑑賞に譲らなければならなかったが、今でもやはり日本人は読書を好む⁽⁴⁾。全体的にみれば、確かに活字離れが続き、その対策として「朝の読書運動」「国民読書年」などのプロジェクトが実施されてきたのも筋が通るが、世界的にみれば、日本におけ

フランスステーンパール・ニールス

る状況の方がマシであるし⁽⁵⁾。また、活字離れは必ずしも文字離れ、ましてや「一億総白痴化」のような実態を意味するわけではないので⁽⁶⁾、さほど心配しなくてもいいように思う。要は、日本は昔も今も読書大国と呼ぶにふさわしいのである。

一方、江戸時代から続くこの分厚い読者層の存在にも関わらず、その読者たちが行なってきた読書の実践と体験についてはまだ意外と知らない。現在の読者についてさえそうであるため、近世の場合はおおさらである。確かに、とくに九〇年代以降に栄えてきた書物研究のおかげで、誰が何を讀んだかということは、大分見えてきた。

そして、その解明された流動的かつ身分超越的な実態が、以前から自明的な前提としてあった「純文学」・「純史料」・「純思想」と「雑書」の二重構造を崩壊させ、文学・歴史・思想学界ともに、強いインパクトを残したのである。ただ、誰が、何を、という問いの一步先にある。「何のため」「どのように」という問題はほぼ未開拓と云ってよい。

本日、評に取り上げる、横田冬彦編『読書と読者』シリーズ（本の文化史）第一巻（平凡社、二〇一五）は、まさにこの未開拓地をもっとも「核心的問題」（25）と明記し、真正面から勝負するものである。評者は、もとよりこの類の研究に直接携わらない門外漢として、この勝負に軍配を上げられるほどの知識はないので、今日の話をも、土俵に立つ行司としてではなく、溜席どころか、マス席でもなく、遠いイス席に座り込む観客の観戦レポートとして聞いていただけたら幸いである。

一 紹介——多様な身分と読書

本日の書評は、「紹介」・「評価」・「課題」という三節構成となるが、その前に本書の出版文脈についてはすこし

触れておきたい。というのも、本書は「読書と読者」というテーマを扱うものであるが、同時に（シリーズ本の文化史）の第一巻である側面もある。本シリーズは全何巻が予定されているかについては、不思議なことにも本書のどこにも記述がないが、同シリーズの第三巻によると、『読書と読者』『書籍の宇宙』『書物文化とその基底』『出版と流通』『書籍の思想史』『様式と造本』という順に全六巻構成であることがわかる。もとより、本書を評価するにあたって、本シリーズの中の位置づけも配慮する必要があるのは承知のことであるが、第三巻までしか出版されていない現時点においてはその作業をここで割愛せざるをえないことを断っておきたい。

本書の構成は、九人の執筆者による全九章からなる。各章が取り上げる事例研究の時代は主に近世に限るが、その地域・身分・書物類が多様であるため、好みに従って、どこから紐解くのも結構だが、本文に先立ち、横田氏による総論から読むのを強くお勧めする。というのも、そこに各章の内容紹介に加えて、従来の読書研究の大胆な展望が試みられているからである。概略は以下のよう

である。

横田氏は読書研究を四期に分けて考えている。第一期は、前田愛がかつて「読者論小史」で扱った二〇年代―五〇年代前半である。当時の「大衆読者」の増加により、文学とは何か、そしてその延長線に「読者」とは何かという問いが生じ、そのことを読書調査などの社会学的方法で解明しようとした時期である。それに対して、五〇年代後半―六〇年代にわたる第二期における方法論は、社会学から文学へ転換するとともに、一種の「歴史研究としての自立」(13)が見られるとする。つまり、対象は単に同時代の読者のみならず、歴史的存在としての読者まで視野を広げた時期に当たる。

続いて、七〇年代後半―八〇年代の第三期においては、読者層が減少する現象に直面し、その危機をいかに乗り越えるかということが課題となったのである。また、近代化という普遍のかつ右肩上がりの歴史観に対して疑問が提示される中、従来の読者層の拡大よりも、読者と読書の質を上げること、新たな価値観に対応するための模索が行なわれる。そして、最後に、横田氏は、九〇年代後半から現在に至る時期を仮に第四期と呼ぶ。対象

が最近であるゆえ、その特徴と意義はまだ客観的に判断しにくい、とにかく読書・出版の減少が深刻化している時代にも関わらず、読書研究が「百花斉放」している、という「皮肉」(25)な現状として捉えている。

以上のような展望はフィールドへの理解に大変助かることはもちろんだが、評者もつとも感銘をうけたのは、その「皮肉」な現状に対する危機感であった。字数を惜しまず、横田氏の言葉でいうと、「現代社会は、贅沢せず真面目に働き、正直に生きるという「普通の人びとの善き心根」が大きく揺らいでいる時代である。「善き心根」と現実との矛盾・ズレの中に苦闘する人びとからこそ、この時代や社会、人間の在り方を示す書物が求められているのかもしれない。経済的な豊かさがそのまま文化の進歩につながるものが自明ではない「危機の時代」においては、読者の歴史研究がその「自立」に際してとりあえずは傍らにおいてきた同時代性、研究者自身が生きる場であるこの時代と対峙する緊張関係をもう一度回復することが必要なかもしれない」(傍点評者)(26)。総論はこの言葉で締めくくられているため、まさに「檄文」として読むべきであろう。我ら読者・研究者はそれに対

して、どう応えるべきか。評者なりのいささかな回答は、また評価の部でのべるが、ここではまず本書に所収されている各論文の内容をかいつまんで紹介したい。

第一章、佐竹明子「江戸時代の公家と蔵書」は、「公家は、蔵書をどのように集め、どのように活用したのかについて検討することで、江戸時代の公家の蔵書には、どのような意義があったのか」(35)を明らかにする。公家は官職(家業)を努めるには、故事有職に関する情報が不可欠な文化資本であったが、その情報を記述する書物・家記の類は、戦国時代の紛争によつて多く失われていた。したがつて、確かなる情報と、それを解説するスキルを得るには、公家間の借貸がさかんに行なわれたのである。佐竹氏は、この借貸行為の実態を野宮家と三条家、という家柄と家礼関係が異なる公家を通して解明している。

野宮家は一六〇九年にできた「新家」として蔵書はまだまだ十分に蓄積ができてなかった。対して、三条家の由緒は長くさかのぼるが、戦国期における系譜の一時中絶と、次々と続く当主の死去により、蔵書が散逸していた。佐

竹氏は、野宮家三代当主の定基さだもとと三条家実万さねつむが蔵書の借り貸しを通して、家業と名誉を取り戻した道のりを詳細に描いている。「近代有職と称する者、皆争論を以て業を為す」(46)実態において、公家らたちがその争論に勝つため、いかに書物に依存していたことがしじみと伝わってくる論文である。

第二章、高橋章則「武家役人と狂歌サークル」は、狂歌会に焦点をあてている。狂歌会というのは、参加希望者は、入料を払い、狂歌を投稿し、撰者はその中から優れた作品を部ごとに選んだのち、優勝狂歌は「狂歌本」として、優勝者は「甲乙録」として印刷され、参加者たちに配布される仕組みであり、天明期以降、全国的に流行していた、連携文芸である。高橋氏は、この文芸を媒介に結ばれた、作者・読者が重なるネットワークを、さらに「移動」という要素を加えて分析している。具体的に、代官という臨時支配と、藩の領地の移封が狂歌ネットワークにどのような影響を及ぼすのか。それが、本章が取り組む課題である。

その解明のために、高橋氏は「雑体」狂歌会を軸にそえて、それに関わった人物の履歴を次々に検討している。

まず、「和歌雑体今撰百首」会の撰者を努めた甲斐国市川代官所手代の西村尊之丞を通して、代官手代という役職と狂歌という文芸の絡み合いを紹介する。続いて、館林領の「雑体」狂歌会が、弘化二年の移封において、秋元藩士が加わることにより、重層的な性格を帯びることになった過程を、秋元藩側の富田直道と、館林藩側の藤園雅直こと須賀重三郎を通して明らかにしている。

第三章、工藤航平「村役人と編纂物」は、武蔵野国川嶋領の惣代と、三保谷宿の名主を勤めてから隠居した、田中畹太夫という人物による『河嶋堤校記』の編纂意図を検討することによって、「編纂物」という、文書類の可能性を探ることにあるという。この文書類が、従来の研究において「便利な史料集」として利用されたにも関わらず、史料批判が十分に加えられていないため、工藤氏は「本来の作成意図や効果（受容と影響）などの機能に注目して読み解くことで、この史料に既存の枠組みとは異なる新たな評価を与え」（104）る、という意欲をもって執筆にあたったのである。

では『河嶋堤校記』はどのような類の書物かという点、一見して川嶋領における水書の歴史を書き留めているも

のにも見えるが、工藤氏は成立年月や、構成項目の分量、内容・文体などを踏まえ、もう一つの意図を指摘する。

つまり、川嶋領内の治水をめぐってトラブルを起こした横見郡の批判と、そのトラブルを壮大な堤建設で解決に導いた藩主の顕彰、という二つの「他者」を設定することで、『河嶋堤校記』は「川嶋領という自己」（225）の主張に繋がったのである。また、そのストーリーを書物の形で、領内の村役人をはじめ、民全体と広く共有することにより、自身を含む田中家という地域指導者としての存在の強調をはかったという。

第四章、山中浩之「在村医の形成と蔵書」は、河内国八尾東郷村の田中元緝という一在村医が形成した、膨大な蔵書と処方集を検討することにより、蔵書は医療にどう活用されたかを明らかにする。まずその子孫が著す『活人録』という蔵書目録（五九五部・二三〇六冊）の分析を行い、医書が多いこと（一五七三冊）、唐本の多いこと（三分の一弱）というかなり専門性の高い実態に、当時、啓蒙的医書の普及によって医療知識を増すばかりの庶民層との差異化を図ろうとする意思を読み取っている。続いて、『弥性園方函』という薬方書に引用された書物が、

約四五%も『活人録』と重なることをもって、「在村医の蔵書は単に権威的な飾りではなく、実質的な医療に資するものであった」(157)として、「書物が医者を形成した」(165)と結論づける。

第五章、横田冬彦「農書と農民」は、知名度が高いわりに意外と詳しく知られていない、宮崎安貞やすさだの『農業全書』を通して、農書というジャンルに提供されている、「知のあり方」を再考するものである。というのは、従来において、農業に関する知は、まず儒教イデオロギーと封建権力に裏付けられた、学者による書物の知が支配的であったが、幕末期には、その系譜はだんだんと百姓自身が農業生活の営みにそって生み出した経験知に取って代わっていく、というふうの説明されてきたのである。

以上の図式に対して、横田氏は、『農業全書』の成立・内容の分析を通して、根本的に異を唱えている。まず、『農業全書』は、単に中国輸入の翻訳知ではなく、それは安貞の自らの営農経験と、諸国老農への諮詢も取り入れた、百姓の立場を積極的に入れた書物であったこと、そして、『農業全書』が提供する知が、百姓の読者にもまた、その立場に添って吸収されたこと、を明らかにする。要は、

横田氏は農書を、学者と百姓の知の対立するジャンルから、むしろその二種の知が交錯・交渉しているものとして捉えなおしている。

第六章、引野享輔「仏書と僧侶・信徒」は、近世仏教を「麻痺状態」として捉える従来の研究を再考する、近年の仏教研究の動向を踏まえ、「仏書」の評価を新にするものである。近世書籍目録の分析により、仏書の圧倒的な多さと、享保期から次第に衰えることを確認した上、その背景にある政治的・社会的な要因を検討する。その際に着目するのは、書肆と寺院との関係である。一斉教育を始めようとしている寺院と、均一な知をいわば「壇林教科書」として提供する書肆は相互繁昌的な関係にあった。だが、類版・賊版が普及させる邪教をめぐって、その関係は対立的にもなるのである。引野氏は、両方の関係性を、浄土真宗の事例を通して検討することによって、当時出版に寄せられた期待と危惧を明らかにしている。

第七章、青木美智男「近世後期女性の読書と蔵書について」は、近世後期の女性がどんな本を読んでいたのか、という「素朴な疑問」から出発するものである。女性読

者が多く存在した事実がわかって、そのあり方を示す資料がなかなかない。女性日記では触れられておらず、近年数多く発見されている蔵書目録も、そのほとんどが男性が所有した目録である。そういった資料困難の中、青木氏が着目するのは、人情本という女性向けに書かれた文学ジャンルである。最新の流行を積極的に取り入れた、この人情本に描写される読者と読者の場面の分析を通して、女性の読書に迫る手法をとっている。その結果、女性は人情本を主に貸本屋から得たこと、大人同士で音読して聞かせあう場合も多いこと、人情本を通して古典知識も吸収したことなどを明らかにしている。

第八章、鍛冶宏介「地域イメージの定着と日用教科書」は、書物が旅へもたらす影響を検討するものであり、「日用教養書」に着目する。この「日用教養書」は、鍛冶氏の造語であり、「教科書や辞書といった本来の用途以外にも、日用教養知識を伝える機能」(391)も持ち合わせた往来物や節用集などの総称であるが、その書物群で大事なのは、商業出版を通して、多くの庶民の手に渡っただけでなく、手習教育のテキストともなり、そこで行なわれた反復練習により、脳に摺りこまれることとなる。

そして、こういう一般知識が一旦定着すると、それを踏まえて多くの文化的活動が波及する。たとえば、「近江八景」の成立により、他国の人も「〇〇八景」を作成したり、またその八景の一つとなる寺院がこれ売りにして旅行者誘致に挑むことも興味深い。また、京都の場合も同じく、それが「生涯の御たのしみをきはめれば、此地にしくことなく」(300)のような宣伝文句として広がることにより、一つの憧れの地、旅の目的地になりかわったことを指摘している。

第九章、宮内貴久「明治期家相見の活動と家相書」は、家相という商業を取り上げ、その営みが明治六年に「迷信」であると禁止されたにも関わらず、二〇―三〇年代にもっとも流行する、という不思議な事実を、松浦琴生きんせいという一人の家相家の生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相仕事を年代順に調べてみると、まずは一つの転換期として明治二年が浮かんでくる。理由の一つは、『地理風水万病根切窮理磁石台』という一枚摺りをはじめに、出版物による顧客獲得戦略に出たこと。もう一つは、従来の家相の改善対象を、窯の位置、水の処置、コタツの位置などに求めたのに対して、

以後、もっぱら窯に特化していくこと。そして、その後者の事実を、当時製糸工場において、繰湯とらゆの熱源を、直接火力を利用する窯からポイラーへ改善する文脈に読み重ね、技術近代化に便乗した戦略として位置づける。

二 評価——「近代」からの開放

書評というものには、おおざっぱに分けて二種類があると思われる。第一に、著者の意図にそった書評。著者が設定した目標はどこまで果たされているか、それが評価の対象となる。対して、第二には、評者の意図にそった書評があげられる。評者は著書が提供する情報や仮説を、著者の意図と関係なく、自分がもつとも相応しい、もつとも意味のあると考える文脈で語りなおし、意義づけるものである。著書を違う角度からみることにより、新たなふくらみ、解釈を加える点において、書評の醍醐味はどちらかといえば、後者の方にあるが、問題は評者の腕にある。というのも、へたな評者であれば、せつかくの醍醐味が「ないものねだり」に成り代わりかねないからである。これを念頭に、自分の力量についてだけよ

く見極めている評者として、今回、もっぱら前者の書評に専念したいと思う。

では、書評の対象をどのように絞ったとして、本書の意図はどこにあるのか。もちろん、編著であるため、各章の執筆者はおそらくそれぞれ異なる志をもって執筆に臨んでいるであろう。よって、各章を個別に評するのが妥当であるが、枚数にも限りがあるため、ここで本書全体をまとめて検討することにする。すると、序文に触れている本書の目標とを合わせるものが許されるのであれば、その目論みは「何のために・どのように読むのか」(24)という問題に関する研究現状と課題を、「書籍研究を志す方」(2)のために展望することにある⁶⁾。そして、この目標に照らして評するならば、評者はその達成具合をちょうど五〇パーセントと見積もる。というのも、「現状」は見事に捉えているとはいえず、書籍研究を志す人々にもっとも必要な今後の「課題」は必ずしも十分に示されていないと考えるからである。そう思う所以を順次に説明しよう。

本書は、「近代」からの開放が読書研究にもたらした豊かな現状をよく反映している点が大変評価できる。従来の読書研究の問題関心は、変革主体・消費者・国民ともなりうる大衆としての読者や⁷⁾、内面的な黙読によつて自我形成をする個人としての読者など⁸⁾、一見して正反対の対象に注がれてきたが、二つともあくまで「近代読者」であり、近世読者はその対照的な存在、もしくは準備段階的な存在としてしか視野に入つてこなかった点において共通していた。また、近代への関心が直接的にない近世読書研究でも、この近代読書論が提供した枠組みと観念を脱することができなかつたのである。たとえば、水野稔の「近世文学で作者と読者を問題にするならば、やはり小説戯作類が中心とならざるを得ないのである」⁹⁾と、中村幸彦の「読者だけの読者、というのがある文学作品は何か、それは昔も今も散文文学だ」¹⁰⁾という記述に、近代読者論における「読者」が、単に「読む者」ではなく、商業としての大量出版（マスメディア）が対象とする、不特定多数な読者に限定されているこだわりがそのまま反映されている。

対して、本書においては、このような、「近代」へのこ

だわりがすっかりと消えている。「不特定多数」の語さえ見つかからないし、小説への執着もない。むしろ、本書に取り上げられる読者は、立体的かつ個性的なものばかりで、彼らはマスメディアが注ぎ込む情報の消極的な受け皿ではなく、その個性と置かれている環境・身分にしたがつて、能動的に読書に取り組んでいる。ときには作者ともなる。ときには身分を超える「読者共同体」を形成する。従来の読書研究では十分に脚光を浴びなかつた、晴れ姿の読者が次々と登場する一冊である。その上、これは言うまでもないが、各論文の執筆者が、それぞれのテーマにおいてすでに厚い業績を残している第一人者ばかりであり、各論文はその業績と経験の凝縮版として、しつかりとした大変頼もしいのである。この点において、本書はその目標どおり、読書研究の現状への優れた紹介となつている。

だが、裏を返せば、この史料と方法の幅の広さは、焦点の拡散とも捉えられる。近代の束縛からの解放は、同時にはつきりとした目標の喪失をも意味する。横田氏が、先に触れた「檄文」の中に現在社会を「正直に生きると

いう「普通の人びととの善き心根」が大きく揺らいでいる時代」(31)としたのは、その喪失感を日常生活にそって譬えたものと理解するが、もちろん研究者も社会の一員として、その影響下にある。民主主義・資本主義・自由主義など、戦後歴史学がもっていた普遍的な座標軸が自明でなくなった現在において、どの立ち位置で、何に對抗し、現代社会にどう貢献できるか、という自問は多くの歴史学者たちが共有している模索課題であろう⁽¹⁾。「近代」にとってかわる価値体系はどこにあるのであろうか。

この問題は複雑で、ここではその一般的な解決を求めない。ただ言えるのは、横田氏が指摘するように、「研究者自身が生きる場であるこの時代と対峙する緊張関係をもう一度回復することが必要」(32)であるということである。

だが、本書の背景にある問題意識には共鳴できたとはいえ、その解決方法については異を唱えざるを得ない。というのも、「この時代との対峙する緊張関係」の必要性が指摘されているにも関わらず、近世と現代をまたぐ視点が準備されていないからである。それには先ず本書の時代対象がほぼ近世のみに限定されていることがある。

全九章中、最後の第九章だけが近世ではなく、近代を扱うものとなっている。評者も近世研究者であり、どちらかといえば、その選択を歓迎するが、本書の目標からすれば、いささか理解しがたいことである。思えば、前田愛がかつて、読書における近世から近代への過程として提示した、①均一的な読書から多元的な読書へ②共同体的な読書から個人的な読書へ③音読による享受から黙読による享受へ⁽²⁾という、過度に単純化された図式への反省も必要とはいえ、「同時代性」をも取り込むためには、なんらかの時代的比較軸を設けることが求められよう。

以上のほか、「この時代と対峙する緊張関係」を取り戻すことを妨げる、本書が孕む二つめの問題は、皮肉だが、その「読書」へのこだわりである。というのは、デジタル革命により、我らを囲むメディア空間がだんだん電子化と視覚化している傾向があるからである。近世から一昔前までのメディア空間においては、「紙」と「文字」が支配的であったのに対して、現在においては「画面」と「画像」がますます重要な位置をしめてきている⁽³⁾。その結果、いわゆる「読書」という行為も、もはや「書」ではなく、「画」を通して、いわば「読画」として行なわ

れている場面が確実に増加している。

本書も、「紙媒体の書籍がなくなるのではないか、書籍の時代は終わりつつあるという危機感」を確認した上、その現状に対(抗)、して、「書籍が時代のなかで担つてきた歴史的作用を明らかに(傍点評者) (3) にしようとしている。もちろん、大変大事な課題ではあるが、問題をこのように設定すると、結果として「書」はまるで「画」と同時に存在しえない、相互排他的なものにみえてくる。一種の書籍ノスタルジアとして誤解されてしまう可能性もある。だが、メディア研究が早くから指摘してきたように、新メディアは旧メディアに取つて代わらず、その機能を相互に複雑化するのみである⁽¹⁴⁾。実際、そのような複雑化する関係性は、近世メディア空間においても十分に認められる。近世における版本の流行は、オーラル文化や⁽¹⁵⁾ 写本文化を廃止へ追い込んだわけでもなく⁽¹⁶⁾、それらと複雑に絡みながら展開していったことは周知のとおりである。同じく、近年に増えてきた電子媒体としての「画」と、紙媒体の「書」との関係も、排他的なものではなく、複雑化する形に展開している⁽¹⁷⁾。読書研究の課題を、この実態に対応できうるものにするために、今必

要なのは、対立観もしくはノスタルジアではなく、むしろ「読書」と「読画」の両方をまたぐことができる視点であろう。

その視点はもちろん、この二語の共通分母だけをこのして、「読」すなわち「ヨム」に集中することである。英語圏との調和をはかつて、「リーディング」も一見して結構だが、それは「空気をヨム(察知する)」「さばをヨム(数える)」「歌をヨム(作成する、もしくは声に出して読みあげる)」といった日本独特の言語文脈を見失う恐れもあるため、却下すべきであろう。やはり、今後読書研究を深めるには、「読書」を「ヨム」視点に変更する必要があると考える⁽¹⁸⁾。

三 課題——読書研究から「ヨム」研究へ

一般的にいえば、歴史学者は主に文字史料を扱う慣習から、視覚メディアの機能を付随的・説明的なものと位置づけることが多いであろうが、当時の人にとっては必ずしもそうではなかった。日本近世は、「文字をしらなければ不利益をうける」という「文字社会」であったと評

価されるほど、文字メディアは重大であったが⁽¹⁹⁾、同じことは視覚メディア（図・画・表・絵など）についてもいえるであろう。地籍図がわからないと自分の土地の広さを把握できない。案内地図が理解できないと名所までたどり着けない。暦がわからないと年中行事を準備できない。判じ物が解けないと笑えない。近世における「文字社会」の成立は確かに画期的な出来事であったが、それは決してほかの視覚メディアの意義の墮落を意味しないことは忘れてはならない。上手な世渡りには、視覚リテラシイも必要不可欠であった。

場合によっては、視覚リテラシイの方が文字よりも大事なることもある。たとえば、杉田玄白は『Onitedkundige Tafelen』（ターヘル・アナトミア）に出会った際、「もつより、一字も読むことはならざれども、臟腑、骨節、これまで見聞するところとは大いに異にして、これ必ず実験して図説したるものと知り、何となく甚だ慾望に思へり」と、その図だけに大いなる印象をうけた。また、のちほど『解体新書』（一七七四年刊）として翻訳作業を始めた際にも、「深くかの諸言を覚え、他事をなすの望みはなかりしなり」と、オランダ語に対する深い関心もなく、「た

ゞ人身形体の一事、千載説くところの違ひたるところを世に示⁽²⁰⁾」すことだけが狙いであった。そのため、図が主役であったのである。つまり、『解体新書』をめぐる杉田玄白の体験を考えるには、「読書」はふさわしくない観念である。あくまでも読図体験であった。

また、同じようなことは表についても指摘できる。現代において、「嘘、大嘘、そして統計」というマーク・トウェインの名言として知られる言葉があらわすように、統計学の柔軟性は危険視されざみであるが、十九世紀において、統計学は社会の見えざる本質をつかめられる技術として大変流行っていたことは周知のとおりである。

そのポテンシャルに魅了された一人として、福沢諭吉もいた。諭吉はヘンリー・バックルの『History of Civilization in England』（英国文明史）を通して、「スタチスチク」という一法によって、「人心の働」を「版に押したる文字を、読むが如く」、簡単に察知できることを知り、「凡そ土地人民の多少、物価賃銭の高低、婚する者、生るゝ者、病に罹る者、死する者等、一々其数を記して表を作り、此彼相比較するときは、世間の事情、これを探るに由なきものも、一見して瞭然たることあり⁽²¹⁾」と絶賛するに至つ

たのである。つまり、もし論吉と『History of Civilization in England』との出会いの意義について語るならば、もちろん読書の視点も大事だが、読表も無視してはならないのである。⁽²²⁾

ここで主張したいのは、近世のメディア空間は、現在と同じく、一元的なものではなかったということである。多数なメディアが存在し、それぞれのメディアを読み解くためには、特殊なヨミ・思考法・リテラシイが必要であった。この視覚リテラシイもまた文字のそれと同じく、生前的・自明的なものではなく、身につけるべき一種の「知」であったのである。その「知」の専門性は、たとえば近年に出版された『絵図学入門』を一ページでも紐解けば、痛いほど身にしみるものだが、当時の事例として、『都名所図会』（一七八〇年刊）の凡例もある。「図中に境地広大なる所は究て細画也。狭少なる神祠小堂は又爾らず。故に図毎に人物あり。形容至つて微少なる人物は、其地広大としるべし。形容微少ならざるは境地狭少なり」という、今で言うところ空間描写の常識を、わざわざ明記していることに、視覚リテラシイの非自明性がよくうかがえる。

また、メディア空間といえば、すこし抽象的な響きがあるかもしれないが、それは具体性のある空間であることを忘れてはならない。その空間の具体像の範疇と意義を表すには、式亭三馬の『柳髪新話』浮世床（一八一三年刊）の冒頭にある、町並みの看板の描写がある。「浮世と書たる筆法は、無利な所に飛帛を付けて、蝕字とやらん号けたる提燈屋の永字八法。その一方は、大長家の路次口をひかへたり」。つまり、三馬の看板のヨミは、「浮世」という文字だけでなく、その書体と場所をふくめるものである。「浮世」という床屋さんほどのような店であったのか、それを察するには、看板の文字以外、看板そのものも重大な情報となることは、三馬のヨミは気づかせてくれる。おなじく「御町使、小便無用」と書いたつもり「御町使小便無用」とある張り紙のスペルミスで重要なのは、その文字自体だけでなく、それが書き間違われたことでもある。⁽²³⁾ メディア空間は、単なる中性的な媒介ではなく、その具体性により、ヨム行為に影響を与えているのである。

場合によつては、その空間はヨマれている内容よりも重要なことさえある。たとえば、おなじみの二宮金次郎

の読書像で着目すべきなのは、読んでいる本のタイトルではなく、時間を惜しんでどこでも勉強したい金次郎の精神のことである。夜間で読書ができるための油も買えないほど貧乏である車胤と孫康と匡衡が、かわりに螢の光、雪が反射する月光、壁の隙間に漏り出る灯光を利用することで、かろうじて勉強できたという中国の故事も、同様の意義をもつのである。このように、ヨミをメディア空間の中で考えるには、ただメディア・場所・書体などにとどまらず、具体的な時間帯や実践も配慮する必要があることが明らかであろう。⁽⁶⁾

以上、メディア空間の多元性と具体性の重大性を示したつもりである例については、あくまでも「表象」であり、かならずしも歴史の実態ではない、と反論する人もいるだろうが、それに対して弁論が二つある。一つは、「表象」にとどまらない事例もあること。たとえば、評者が最近関わった研究には、近世中期における丙午迷信打破運動がある。この運動の中心人物を行動に働きかけたのは、室内での読書ではなく、お菓子屋の外壁にはってあった一枚の張り紙のヨミであった。そして、彼自身もま

たその張り紙のメッセージをさらに広めるために採用したのも、屋外で行なわれた、一枚摺りの手渡しや、大絵馬を神社に奉納することであったのである。近世のメディア空間の範囲をどう考えるか、人々はそれをいかにヨミ、それにいかに触発されたのか、そういった問題群を深く考えさせられる事例であった。⁽⁷⁾

そして、「表象」について二つ目に指摘したいのは、「表象」としての追及も決して無意味ではないということである。確かに、評者もどちらかといえば、記号論に疎く、イーザー氏の「内包された読者」(implied reader)や⁽⁸⁾フィッシュ氏の「精通した読者」(informed reader)のような⁽⁹⁾文芸批評的な読書論を展開する力量も関心もない。ただ、その極端までとはいかなくても、「表象」を取り入れながらも、土に足のついた歴史研究は可能であると考ええる。特に、現在「思想史化」している歴史・文学史研究風潮において、「表象」はなくてはならない視点である。先に触れた二宮尊徳の読書像も、決して歴史的事実ではなく、勝手に作られた「表象」でありながらも、明治期の立身出世主義をささえるために、ある程度機能していたことは否めない事実であろう。⁽¹⁰⁾ 同じく、車胤と孫康

と匡衡きやうこうの貧乏読書武勇伝の真否は大変疑わしいものであるが、江村北海がそれをその『授業編』（一七八三年刊）に引いて、読書教育の材料として利用したことに、歴史の実態と合流する接点が認められる⁽³¹⁾。また、石門心学が、たとえば儒者を「文字芸者」や「人ノ書物箱」とけなすことなどによって、ひたすらに唱えられる反文字・反書物知の思想的立場は⁽³²⁾、心学の著しい出版活動とは相容れない偽善的なものであったにもかかわらず、そのスタンスが「表象」として心学の最も大いなる原動力となったことに変わりはない。たかが「表象」、されど「表象」。

本書が今後の課題を十分に提供していないという批判は、以上のような多元的なメディア空間の存在を念頭においたものである。つまり、本書のように、「読書」という一種のメディアに限ったヨミに集中して検討する研究ももちろん重要な作業で、すでにやりつくされているとは到底言えない⁽³³⁾。しかし、読書に限った研究にしても、メディア空間全体に配慮せずに検討するには二つの危険性があると主張したのである。つまり、第一に、読書以外のヨミの比較対象がないため、結局「書」のヨミの

特徴が捉えられない。第二に、「読画」が重大性をます「同時代性」との緊張関係を取り戻すのは困難である、という点である。

むしろに——デジタル・ヒューマニティーズへの期待

以上、筆に任せて、いろいろと勝手な要求をしてきたが、結局「ないものねだり」の領域に踏み出してしまった気がする。というのも、本書執筆者をふくめる読書研究者は、こういった「新文化史」的問題に気づかなかつた、もしくは無関心であったとは思わない。事実、近代読書研究をリードしてきた永嶺重敏は、早くも二〇〇一年において、「読書論と称されるものの抽象的なステレオタイプへの反発から、より具体的に実証的な読書の社会史を追及してきたつもりであった。しかし、最近そこにある種の物足りなさを覚えるようになってきた。読書調査や社会階層のデータを利用して、読書の社会史的分析に徹すれば徹するほど、掌からこぼれる水のようにこぼれ落ちるものがある。それは人々のそれぞれの人生における読書体験の一回性とでもいえるべきものである。」⁽³⁴⁾と、

文化史的な視点の見直しを主張したのである。ただ、そういう意識があったにもかかわらず、メディア空間の課題がいまだ追求されてこなかった背景には、なによりも史料の壁があると考える。

読書というのは、だいたいが跡を残さない行為であるため、それを再現できる史料もおのずから乏しいのである。出版記録や蔵書の分析を通じて、ある程度「何が」読まれたかが分かったとしても、「どのように」ともなる」と問題が複雑で困難になる。読者が自分のヨム体験を詳細に物語る日記類のようなものが理想の史料であるが、そう簡単には見つからないものである。その結果、読書史料の多くは、断片的であり、逸話的であり、表象的となってしまうのである。評者がここまで引用してきた史料もこの類のものばかりで、決して統一感のある論証にはなれない。

そういう意味で、いまだ文化史の方法に躊躇する風勢はむしろ賢明ともいえる。だが、史料というのは、問題関心があつてこそ意味があるもので、後者が前者に左右されるべきではないのも理想であろう。つまり、現在の状況において、メディア空間におけるヨミを明らかにす

ることが不可能であるならば、我らの課題はそのことを可能にする状況を作ることにあるであろう。その点について、「RED」プロジェクトがいい模範となる、と評者は考える。

「RED」というのは、すなわち「Reading Experience Database」の略称であり、一九九六年にイギリスのオーブン大学にてスタートした企画である⁽³⁵⁾。その意欲的な目標は、イギリスの一四五〇―一九四五年間に行なわれた読書体験に関する記述を網羅的に登録することにある。小説、新聞、雑誌などはもちろん、パンフレット、葉書、ポスターなど、人がそれを読んだことについて記述を残していれば、すべてが登録対象となる。また、もつとも重要なのは、これらの膨大なデータが可能な限り、著者と読者の姓名・年齢・ジェンダー・階級・職業・宗教・場所や、メディアのジャンル・題名などを明記した上に登録整理されることである。このように整理された三万个を上回る記述情報が、二〇〇七年よりウェブ上で公開されたことによつて、誰でも関心のあるキーワードで検索することが可能となつている。しかも、ユーザーもまた自分で情報を加えることが可能なため、情報量がいま

だに増え続けているのである。さらに二〇一一年にオランダ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドのヨム体験情報も同時検索可能な姉妹サイトもアップされたので、国際比較研究や、書物流通研究の面でもさらに便宜性がました。日本におけるデジタル・ヒューマニティーズの受容は消極的で、一昔前までは、こういったデータベースを導入するのは無理な話であつただろうが、近年の国文学研究資料館や国際日本文化研究センターの電子データベースの豊富化の動きからすると、もしかするとこういうものも実施可能な時期がきたのかもしれない。期待するのみである。

以上、自分が土俵に立つたことがないにも関わらず、業績の分厚い横綱たちにむけて、あまりにも無責任な観戦レポートを披露してしまった気がする。的外れのコメントも多かったはずなので、ぜひご教鞭のほどをよろしくお願ひします。

【注】

(1) オイレンブルク著、中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』上、(雄松堂書店、一九六九)三四二頁。

(2) 総務省統計局『平成23年社会生活基本調査』表四〇による。
(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/h23kekka.htm>)

(3) 文部科学省『生涯学習施策に関する調査研究―読書環境・読書活動に関する諸外国の実態調査』による。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chouosa/1341189.htm)

(4) 佐藤卓己『テレビ的教養―億総博知化への系譜』(NTT出版、二〇〇八)。

(5) 本シリーズの発端は、科研費プロジェクト「書物・出版と社会変容」研究の深化と一般化のために(研究課題番号・23242040)にある。

(6) 厳密に言えば、序文にはさらにもう二つ、目標があげられている。①「一般の方々」を対象に、「書籍が地域の歴史を知る第一級の史料であることを広く知ってもらうきっかけ」を提供することで、今後の書籍保存と蓄積を促すこと。②「書籍の時代は終わりつつある」という危機感を多くの人たちがもつ」現在において、「書籍の時代とはなんだったのか、あらためてふりかえってみる」と(3)。

(7) 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、一九八一)、永嶺重敏『読書国民』の誕生―明治30年代の活字メディアと読書文化』(日本エディタースク

- ル出版部、二〇〇四）等。
- (8) 外山滋比吉『近代読者の成立』（みすず書房、一九六九）、前田愛『近代読者の成立』（有精堂出版、一九七三）等。
- (9) 水野稔『近世文学における作者と読者』『季刊文学・語学』第三四号、一九六四、一六頁。
- (10) 中村幸彦『近世の読者』『大阪府立図書館紀要』第九号、一九七三、八四頁。
- (11) 荒武賢一朗編『近世史研究と現代社会―歴史研究から現代社会を考える』（大阪・清文堂出版、二〇一一）、歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリテイ』（東京大学出版会、二〇一三）など。
- (12) 前田愛『近代読者の成立』一二六頁。
- (13) この現象は学問にも反映され、九〇年代以降の文化社会学理論において、かつての「言語論的転回」に対して、「画像論的転回」(pictorial turn, W. J. T. Mitchell)、「図像論的転回」(iconic turn, Gottfried Boehm)、「視覚論的転回」(visual turn) などが主張されるようになったほかである。
- (14) Lamberti, Elena. "Not Just a Book on Media: Extending the Gutenberg Galaxy," Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. (Toronto: The University of Toronto Press, 2011) p. xli.
- (15) 後藤宏行『語り口の文化史』（京都・晃洋書房、一九八九）、若尾政希『太平記読み』の時代―近世政治思想史の構想』（平凡社、一九九九）など。
- (16) この点に関しては、中嶋隆「板本時代の〈写本〉とは何か」『国文学―解釈と教材の研究』第四二巻一―号、一九九七、谷脇理史「近世の作者と読者」『時代別日本文学史事典 近世編』（東京堂出版、一九九七）等、軽く触れてきたものは多いが、最も体系的に論じているのは、Kornicki, Peter F. "Manuscript, not Print: Serial Culture in the Edo Period," *Journal of Japanese Studies*, 32:1, 2006.
- (17) Baron, Naomi S. *Words Unscreen: The Fate of Reading in a Digital World*. (New York: Oxford University Press, 2015).
- (18) 推測ではあるが、この視点転換を防止してきたのが、研究風潮そのもの以外、日本語自体でもあると考える。問題は三つである。第一に、「読書」の日常語としての支配的立場があげられる。現在使われる熟語には、違和感なく「読」の対象となる目的語はもはや「書」のみであるため、「読〇」といえば、「読画」「読絵」「読心」「読譜」「読影」「読唇」「読図」よりも真っ先に頭をよぎるのは「読書」であろう。第二に、「読書」の研究系譜の

- 支配的立場がある。早くも明治期に築かれた読書論の系譜と観念枠組みを脱するのが難しいのである。そして最後に、アカデミアにおける漢語・熟語の支配的立場がある。「読書」以外の「ヨム」行為が視野に入ってきたとしても、それらを一つの熟語の元で収斂できないかぎり、同じフィールドの分析対象にはならない。以上の三つの要因から生じる言語的な違和感こそが、「読書」を「ヨム」研究に展開する、もつともの大きな壁だと考える。
- (19) 辻本雅史「文字社会の成立と出版メディア」辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』（山川出版、二〇〇二）一一一頁。近世における「文字社会」の成立については、青木美智男「近世の文字社会と村落での文字教育をめぐる――『長野県史』通史編近世と網野善彦氏の近業に刺激されて」『信濃』第四二巻二号、一九九〇（後）、青木美智男・若尾政希編『近世の思想・文化』展望日本歴史16（東京堂出版、二〇〇二）にも所収）を参照。
- (20) 杉田玄白著、緒方富雄校註『蘭学事始』（岩波書店、一九五九）二四、四〇頁。また、玄白は『ターヘル・アナトミア』よりも先にであった『Heelkundise Onderwijzingen』（外科治術）についても、「これを披き見るに、その書説は一字一行も読むこと能はざれども、その諸図を見るに、和漢の書とはその趣き大いに異にして、図の精妙なるを見ても心地開くべき趣あり。よりに暫くその書を読み受け、せめて図ばかりも摸し置くべきと、昼夜写しかりて、かれ在留中にその業を卒へたり」と同じような体験を述べている（同著、一九二二〇頁）。
- (21) 福沢諭吉「文明論之概略」『福沢諭吉全集』第四巻（岩波書店、一九五九）五四、五六頁。
- (22) 統計学と複式簿記との出会いが、諭吉の思考法とレトリックに及ぼした影響について、Hsiung, Hansun. “Woman, Man, Abacus: A Tale of Enlightenment,” *Journal of Asiatic Studies*, 72:1, 2012」という興味深い論文がある。あわせて、十九世紀イギリスの電車時刻表のヨミに「こゝろ」Esbester, Mike. “Nineteenth-Century Timetables and the History of Reading,” *Book History*, 12, 2009、も参照するに値する。
- (23) 杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・ロナルド トビ・中野等・平井松午編『絵図学入門』（東京大学出版会、二〇一一）。
- (24) 秋里籬島「都名所図会」竹村俊則編『日本名所風俗図会』第八巻（角川書店、一九八一）七頁。振りがなは、版本原文にしたがって評者が施したのである。
- (25) 本田泰雄校註『浮世床・四十八癖』（新潮社、一九八二）二二三頁。

- (26) 以上、評者が描写してきたメディア空間は、近年、ロシア史学者のサイモン・フレンクリンによって提示された「*graphosphere*」(視覚装置空間)、すなわち「メッセー」と情報記録・保存・表示・伝播する視覚装置と、それが置かれている社会的文化的空間の総体」といふ観念を念頭においたものである (Franklin, Simon. Mapping the Graphosphere: Cultures of Writing in Early 19th-Century Russia (and Before), *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, 12:3, 2011, p. 531)。
- (27) フォンステーンパール・ニールス『丙午縁起』解題・翻刻―近世における施印伝播の一例として』『書物・出版と社会変容』第一四号、二〇一三、同著「Taming the Fire Horse: The Free Distribution of Anti-Superstition Pamphlets in Early Modern Japan, *East Asian Publishing and Society*, 5:2, 2015.
- (28) ヴォルフガング・イーザー著、轡田収訳『行為としての読書―美的作用の理論』(岩波書店、一九八二)。
- (29) スタンリー・フィッシュ著、小林昌夫訳『このクラスにテキストはありませんか―解釈共同体の権威』(みすず書房、一九九二)。
- (30) 岩井茂樹『日本人の肖像 二宮金次郎』(角川学術出版、二〇一〇)。
- (31) 江村北海「授業編」黒川真道編『日本教育文庫―学校編』(日本図書センター、一九七七) 五九五頁。
- (32) 辻本雅史「マスローグの教説」子安宣邦編『江戸の思想』第五号 読書の社会史(ベリかん社、一九九六)。
- (33) 具体的にいえば、かつてロジェ・シャルチェが書物文化史の課題として提示した、「モノ」・「実践」・「交渉」(この三つの語は評者が便宜上単純化して勝手に割り当てたもので、そのままシャルチェ本人の語ではない)の三点中、「モノ」の視点だけは日本において大変盛んでありながらも、「実践」と「交渉」はあまり振り返られていないというのが現状であろう。つまり、「モノ」の視点には、「作者は何をなそうと、書物を書かない。書物はまったく書かれない。書物は写字生その他の職人によって、職工その他の技術者によって、印刷機その他の機械によって作られるのだ」という意識を踏まえ、書物の形態がその流通・享受へもたらす影響に着目することである。「実践」の視点は、「読書は思惟作用の抽象的な操作であるばかりか、身体への投入であり、空間への書き込みであり、自己とのまたは他者との関係でもある」意識を踏まえ、読書習慣や道具に目を配ることである。また「交渉」の視点は、テキストの意味を安定したのではなく、

常に「交渉」される対象とし、「同一のテキストに対する、さまざまな把握・取り扱い・理解というものがどうして可能なのか」を問いかける立場である。(ロジエ・シャルチェ著、長谷川輝夫訳『書物の秩序』文化科学高等研究院出版局、一九九三、三三一―三五頁)。

(34) 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部、二〇〇二)二六一頁。

(35) <http://www.open.ac.uk/Arts/reading/UK/>

【附記】

本書評は二〇一五年一月七日、一橋大学佐野書院に行なわれた、「書物・出版と社会変容」研究会第一〇〇回で発表した口頭原稿に多少加筆したものである。

(横田冬彦編『読者と読書』(「シリーズ〈本の文化史〉」

1)、平凡社、二〇一五年五月刊、定価・本体二八〇〇円、

総頁数三三二)